



いきていくと  
いうこと

---

---

lily

---

この本ほどわたしに、いきっていくということが尊いことなだと痛感させてくれた本はないし、この本ほどわたしに、いきていいんだと肯定させられた本はないです。希望をみました。

書かれている言葉すべてが、きれいな光になって、わたしのところに灯りをともしました。

読んでいる最中、わたしは何回も今までわたしが失った物事を思い浮かべていました。

物語の最初の方は、ところが痛くて仕方なかったけれど、進むにつれて、それらがとてつもなくいとおしくなってきたんです。

受け入れる、とも違う、それでいて、忘れ去る、とも違う。

とにかく、当時のわたしに、その感覚全てが必要でした。

ほんとうに、出会うべくして、出会ったんだろうと思います。

当時、何が関係しているのかは、分からないのですが、

本がすごく読みたくなったり、そうかと思えば、

読みたいのに、読めなくなったり。すごく不安定な状態でした。

不安定。わたしの人生は、思えばいつだってそう。

失っては、涙して、それでもなにかを掴みたくて、

動いてみる。がむしゃらに、いろんな物事に繋がりがかった。

なにをしてもダメになってしまう。

でもあきらめなかったんです。あきらめることだけは、したくなかった。

そうして、今の職場に、本屋さんに入ったのが、二年半前。

わたしは、本が好きだったし、実際すごくすてきな職場でした。

任された担当は文学の棚でした。

働き始めて一年半くらいの時、

わたしに本の紹介文を書いて欲しいと、出版社から依頼がありました。

すごくうれしかった。けれど、その時わたしはゆらゆら揺らいでいて、

本を開くことがむづかしい状態でした。

「好きな本、三冊の紹介文」を書いてくださいと言われて、

ずっと前から好きだったよしもとばななさんの、「もしもし下北沢」を一番に選びました。

深呼吸して、やっとページを開いて、

その瞬間から、うつくしい文章に惹きこまれ

すーっと、いやな力が抜けていきました。

読み進めるうちに、安堵の涙がぽたぽた落ちました。

わたしは、これで、よかったんだ。

大きなものに守られている、包み込まれている、

そして、ほんとうの強さとはなにか、気付かせてもらいました。

それは今まで思っていたわたしの強さとは違う、もっともっと愛に満ちた強さ。

日常には、失ったことが溢れていて、  
時にそれらはわたしたちを動けなくするけれど、  
きっと、それでも生きていくことがすばらしいんです。  
生きていけば、少しずつでもなにかが変わって、  
わたしのように、こんなにすばらしい本に出会うことだってできる。  
きっと希望ってあるんですよ。  
みじめな思いしても、哀しいことがあっても、  
その先に、希望を見出すこと。  
それはとてもむつかしくて、わたしもひとりじゃ太刀打ちできなかったけど、  
ひとには、そういう風に生きていくことができる、  
そういう力があるんだっていうことを、この本を読んで、強く感じました。

ああ、いつまでたっても未熟なわたしを、この先何回だっていとしい気持ちで泣かせてほしい。  
そしてうつくしい言葉達を、きっと、わたしはこれから何回もここに灯りをともすでしょう。